

二人浜路

野村胡堂

—

「親分、面白い話があるんだが——」

ガラツ八の八五郎は、妙に思わせぶりの調子で、親分の銭形平次に水を向けました。

「何が面白くて、膝っ小僧なんか撫で廻すんだ。早く申上げないと一帳羅ちようらが摺すり切れそうで、心配でならねエ」

そう言う平次も、この頃は暇でならなかつたのです。

「親分が乗り出しゃ、一ペンに片付くんたが、あっしじゃね」

「たいそう投げてかかるじゃないか」

「せつかく頼まれたが、どうも相手がいけねエ」

「おおよ大家か借金取か、それとも叔母さんか」

「そんな不景気なんじゃありませんよ。イキの良い若い娘なんで、へッ」

八五郎は耳のあたりから首筋へかけてツルリと撫で廻しました。余っ程てこ手古摺ずった様子です。

「なる程そいつは大家より苦手だ。若い娘がどうしたんだ」

「朝起きて見ると、娘が変っていたんで。姉様人形のように、人間の首が一と晩で摺り替えられるわけはねえ。そんな事が流行はやった日にゃ——」

「待ちなよ八、そう捲まくし立てられちゃ筋が解らなくなる。どこの娘が変っていたというのだ」

「こういうわけだ、親分」

八五郎はようやく落付いて筋を通しました。

小日向に屋敷を持つている、千五百石取の大旗本大坪石見いわみ、非役で内福で、この上もなく平和に暮しているのが、朝起きて見ると、娘の浜路はまじがまるつきり変っていたというのです。

浜路は取って十九、明日はいよいよ、遠縁の三杉島太郎次男要之助を婿養子に迎える筈で、大坪家は盆と正月がいっしょに来たような騒ぎ、当人も何んとなくソワソワと落付かぬ心持で床へ入った様子でしたが、翌る朝——というところ、ちようど昨日の朝、いよいよ今日は婚礼という時になって、婆やお篠しのが顔色を変えて主人の大坪石見に耳うちをしたのです。お嬢様の様子が変だから、ちよつとお出でを願いたい——と。

「それから大変な騒ぎだ。ケロリとして顔を洗って、身支度をしている娘は、年恰好も浜路と同じくらい、武家風でツンとしたところのある浜路に比べると、下町風で愛嬌があつて、優しく、ちよいと鉄火で、負けず劣おとらず綺麗だが、

人間はまるで変っている」

「それから何うした」

話の奇きつ怪かいさに、平次もツイ吐はい月峰ふきを叩いて膝を進めました。

「何しろ、色は少し浅黒いが、眼が涼しくて、口元に可愛らしいところがあつて、小股こまたが切れ上がって、物言いがハキハキして——」



「そんな事を訊いてるんじゃないやねえ、それからどうしたんだよ」

「役者の拵こしらえを話さなくちゃ、筋の通しようはないじゃありませんか、——そのちよいと伝法なのが滅法界野暮よつたい、武家風の刺繡ししゅう沢山しんざんなお振袖か何んか鎧よろつて、横よこつ坐まりになつて、絵草紙えくさじか何んか読んでいるんだから、親分の前だ
が——」

「馬鹿野郎」

ガラツ八の話のテンポの遅さ。これが親分を焦じらして、自分から乗出させる魂胆こんたんと知りながらも、平次はツイこう威勢いせいの良い『馬鹿野郎』を飛ひばしてしま
いました。

「まず騙だまされたと思つて、逢あつて見て下さいよ。相手は武家屋敷だが、これが表沙汰うらさたになると、大坪家の家名かに拘かわるから、用人の小峰右内こねという人が、持
て余あしてそつと、あつしに頼たのみに来きたくらいだ。旗本のあ身に御機嫌ごきげんを取らせ

るのも、満更悪い心持じゃありませんよ」

「呆あきれた野郎だ」

「大事の大事の一人娘が行方不知しれずになったが、その代りのニセ首を、成敗することも突き出すこともならねエ」

「フーム」

「娘はどこへ行った。お嬢様をどこへ隠した——とヤワヤワと訊くと、『私が浜路でございます』と、ニコニコしているんだから手の付けようはねえ。あんな時は、親分の前だが、綺麗な娘はトクだね。同じニセ首でも、こちとらのようなのだと、いきなり縛り上げて拷問ごうもんにかけられる」

ガラツ八の話は遊び沢山で、要領から遠くなるばかりですが、とにかく、千五百石取の大身の一人娘が、祝言の前の晩、一夜のうちに摺すり替えられていたことだけは間違ひありません。

「どりゃ、その綺麗なニセ首でも拝んで来ようか」

平次もとうとう御輿みこしをあげる気になりました。

二

平次とガラツ八が、小日向台こひなただいの大坪家へ行ったのは、山の手の町々が、青葉の香にムセ返るような、四月の美しい日盛り。

「小峰さんは居なさるか。銭形の親分をつれて来たが——」
お勝手口から、心得顔に入るガラツ八の顔へ、

「あ、八五郎か、大変なことになったよ。まア入ってくれ」
当の小峰右内は、せっかちらしい言葉を叩き付けるのです。

「どうしました、小峰さん」

「どうも斯うもないよ、まず見てくれ」

平次とガラツ八は、不安と焦躁しやうそうに眼ばかり光らせている雇人の中をお勝手から納戸へ、奥の方へと通う廊下みちびを導かれます。

「これだ」

とある部屋の障子を開けると、中には五十年輩の女が一人、不自然な恰好で、床の上のこと切れているのです。

「婆やさんじゃありませんか」

とガラツ八。

「けさ殺されていたんだよ。下女が見付けて大騒ぎになり、ともかくも首に巻き付けた細紐ほそひもだけを外はずして、一応介抱して見たが、もう冷たくなっているんだ。

息を吹き返す道理はない。婆やの伴が品川にいる筈だから、大急ぎで人をやったが、まだ来ないよ」

小峰右内は、武家の御用人らしくもなく、少し顛倒てんどうしておりました。

「親分」

八五郎は後ろから跟ついて来た平次に場所を譲ゆずりました。

婆ばやお篠しのは、五十前後がんじょうの巖乗がんじょうな女で、いざとなったら、相当力もありそうですが、不思議なことに大して争あらしった様子もなく、床から半身をのり出しては居りますが、至いたって平穩へいゑんに死んでいるのです。

「八、少し起して見てくれ、——お前は足の方を持つんだ、——あッ噛み付くぜこの仏様は」

平次は死骸の頭を抱えて、床の上に真まっ直すぐに起しながら、そんな事を言うのです。

「親分、脅おどかしちゃいけません」

ガラッ八はドキリとした様子でふり返りました。

「首を起した弾みで、齒が鳴ったんだよ。心配することはねエ」

「あんまり結構な人相じゃないから、ツイドキリとしますよ」

「罰の当たったことを言うな。——この紐は少し華奢なようだが」

「その代り丈夫ですよ、真田紐だから」

平次は兇器に使われた、萌黄の真田紐を取上げました。

「こいつは何に使った品だろう。刀の下緒じゃなし、前掛の紐じゃなし、ひどく新しいが——」

平次は萌黄染料の匂いを嗅ぎながらそんな事を言うのでした。

「お嬢様の御道具の箱を縛った紐だ」

小峰右内は以ての外の顔をして見せます。

「その嬢様は何処に居なさるんで？」

「逢わせましょう。が、その前に、ちよつと訊いて置きたいが——」

と小峰右内。

「へエ、——どんな事で」

「これが表沙汰になると、お家の瑕瑾かきんになる。奉公人の一人や二人死んだのは、急病の届出ですむが、お嬢様が変わったとなると、これはうるさい、——万事呑込んでくれるであろうな」

「それはもう、御用人様。あつしは町方の御用間で、御武家屋敷のことには、立入る筋じゃございません。御老中、御目付などの御歴々と、あつしの仕事とは、何んの関係もないのでございます」

「よしよし、そう判つてくれると大変ありがたい」

「たいそうお困りの様子ですから、お嬢様を捜し出してあげた上、町人や奉公人に悪いのがあったら、それは容赦をいたしません」

「じゃ斯こう来てくれ」

右内は二人を案内して、また幾間か先へ暗い廊下を進みました。

「此処だ」

小峰右内の開けた唐紙の中を見て、二人は顔を見合せました。婆やの死骸とは比べものにならない、そこには刺戟しげき的なものがあつたのです。

三

それは、八五郎が口を極めて讚美した、変え玉の娘でした。いよいよ一と責めする気になつたものか、燃え立つような赤い扱しごき帯でキリキリと縛り上げ、嫁入道具のおびただしく取散らした中、簞たんす笥の引手にそれを結えてあつたのです。

ドカドカと入る三人の姿を、娘は顔をあげて怨うらめしそうに眺めましたが、すぐまた眼を伏せて、きかん気らしい唇をキツと結びました。ガラッ八がすつか

り有頂天になつて、手持の語彙ホキヤフラリを総仕舞にただけあつて、悩ましき情景の中に据すえるにしては、この上もない妖艶さでした。

「どうしたことです、これは？」

平次は娘と用人の顔を等分に見比べました。

「この娘が怪しいとでも思わなきゃ——」

右内は苦りきつています。

「それは？」

「見も知らぬ人間が、明日は祝言というお嬢様の代りになつて居たり、何にか仔細しさいを知つていそうな婆やが殺されて、首に巻いてあつた細紐がこの部屋から出た品だったり、疑えばいくらか変なことがある。殿様がこの娘を責めて見ろと仰しやつたのも無理はあるまい」

「御尤もですが、こんなにひどく縛つちや可哀想です。どれ」

平次は娘の後ろに廻ると、小手と首を締め上げた扱帯しじきを解いて、その前に片膝を突きました。

「さて、改めて聴くが、お前はどこの誰だえ？ 誰に頼まれてここへ入って来たんだ。——人殺しの疑いを受けているから、用心をして返事をするが宜い。

——黙って居ちや、言い訳の出来ないものと思われるかも知れないよ」

「——」

娘はチラリと平次の方を見ましたが、相変らず黙りこくって、唇を開こうともしません。

「銭形の親分だよ。お前のために悪いようにして下さる気遣いはない。知っていることを皆んな言うが宜いぜ」

ガラッ八は横から長ンがい顔を出しました。昨日も一度逢ってるんで、これはいくらか心易立てです。

「申しますワ、錢形の親分さんなら」

娘は顔をあげました。長い睫毛まつげが濡れて、真珠のような涙が豊かな頬にこぼれます。

「それが宜い。——お前が正直にしてくれさえすれば、この俺が引受けて、悪いようにはしてやらない」

平次はそう言いながら、もういちど立上がって、娘を縛った扱帯しごきを、皆んな取払ってやりました。後ろの方で、小峰右内がむずかしい顔をしておりますが、平次はそれを振り向いても見なかつたのです。

「私はやはり、此処のうちの子なんです。浜路というのは、私の名前に違いありません」

娘の言葉は平次にも予想外でした。

「それはお前、本気で言っているのか」

「え、——尤もそれを知ったのは、ツイ一と月前のことだけれど」

「それまでお前は何んと言う名だったんだ」

「関せきと言いました。草加そうかの百姓うまきち午吉の子ということで育ち、浅草に引越して、もう十年にもなります」

「もう少し詳しく話くわしてくれ。その草加で育ったお前が、どうしてこの大坪様の子だと名乗ったんだ」

お関の話は、少なくとも平次とガラッ八には奇っ怪なものでした。

それは、今から十九年前のこと、旗本大坪石見の奥方は、娘浜路を産んで間もなく亡なくなり、嬰兒えいじは草加の百姓午吉夫妻に預けられて、三つになるまで育ち、それから小日向こびなたの大坪家へ歸されたのですが、お関に言わせると、午吉夫婦は自分の娘お関が、里子はましの浜路と、よく似ているのを幸い、娘をゆくゆく大旗本の跡取娘にするため、人知れず取換えて育て上げ、浜路をお関にして手許

に留めおき、お関を浜路として、三つになる時小日向のお屋敷へ返した——というのでした。

「私も、そんな事とは知らず、午吉夫婦の娘のつもりで、浅草で小さい荒物屋の店を出している偽にせの両親のところで育ちましたが、今から一と月前、母親が病気で死ぬとき、——これは一生言わないつもりだったが、黙って死んでは冥途めいどの障りさわ、何がどうあろうとも、言わずに死ぬわけには行かないと、父親の留守中に、そつと私に話してくれました」

あまりの事に、平次もガラッ八も、用人小峰右内も、開いた口が塞ふさがりません。

「母親が死んだ後、父親の午吉は年にも恥じぬ放埒ほうらちで、家へ寄り付いてもくれません。思案に余って、昔からの知合で、私を里子に出す時世話をしてくれたという、このお屋敷の婆おばや——お篠しのさんを呼出して相談すると——」

話の重大さに、聴く方がツイ固唾かたずを呑みました。お関の浜路は、何んの作意もなく静かな調子でつづけます。

「お篠さんに話しをすると、最初はひどく驚いていましたが、急に乗気になつて、——お嬢さんの婚礼が明日に迫つて、今更どうしようもないが、実はお嬢さんはひどくこの祝言を嫌がつている。無理に三杉さんの御次男を迎えたら、三日経たないうちに、お嬢さんは自害じがいをするに違いない。急場の凌しのぎが付いたらまた何んとかなろう。お前が本当にこの屋敷のお嬢さんなら、ちようど仕合せだから、今晚そつとやって来て、お嬢さんと入れ換かわつてくれという頼みでした」

「私に否やのあろう筈ありません。今ではどこへ行く当てもない私、浅草の

荒物屋へ帰ったところで、明日の暮しの工夫もつかない私ですもの。お篠さんの頼みの通り、お嬢さんと入れ換って、翌る朝、お篠さんに見付けられたように仕組みました」

「お嬢さんは何処へいらっしたんだ」

右内は我慢がなり兼ねて口を挟みました。

「それは判りません。私は庭木戸の外でチラと見たつきりですもの。——でも、其処には、若いお侍が待っている様子でした」

「若いお侍？ 顔を見なかつたのか」

「何んにも見ません。背が高く、真っ直ぐにシャンと立って居ただけは気がつきました。縁側の戸を開けて、お篠さんが呼んでいるので、大急ぎで入ったんですもの」

お関の浜路の言葉はあまりにも常識の桁けたを外れますが、ことごとく作り事に

してはあまりによく筋が通ります。十九年前この屋敷の奥方が亡くなって嬰児えいじ浜路を草加へ里子に出したのも事実、その浜路が十九になって、婿選むこえらみという段になった時、父親の氣に入つた三杉の次男要之助をひどく嫌っていたことも事実です。

「右内、困つた事になつたのう」

唐紙を開けてズイと入つて来たのは、五十を幾つか越したらしい立派な武家——主人大坪石見でした。

「殿様、さぞ御心配なことで。——私は神田の平次でございます」

平次は丁寧ていねいに膝を直しました。

「御苦労だな。——近ごろ神田の平次というが大層な評判だから、右内がとやかく言うのを、私から頼むように言つてやったのだよ。御目付衆の耳にでも入ると面倒だ。何んとか宜よろいように頼むよ」

「かしこまりました。御当家の落度ではございませんから、決して御迷惑になるような事はいたしません。ところで——」

「何にか訊ねたいことがあるのか」

「お嬢様が三つで里から帰られたとき、何にか斯う——変だな——と思召したことはございませんでしょうか」

「忘れたよ、平次。奥でも生きて居れば、また何にか思い付くことがあるかも知れないが、その頃私は甲府こうふの御勤番でな」

「御尤もで。——もう一つ承わります。三杉様御次男との御縁組は変更は出来なかつたのでございますか」

「早く婿を欲しいと思つてツイ娘の気も知らずに運んだ私の落度だ。が、武士と武士との約束は容易に変更の出来るものでない。娘が嫌だと申しますからと言つて縁談を断わるわけに行かないよ」

「もし、御嬢様が御無事でお戻りになりましたら、やはり元の縁談をお進めになるつもりで——」

「娘の病氣と言って祝言を伸ばしてあるが、下人の口がうるさいから内々三杉家では承知しているかも知らない。向うから断わって来れば一番無事なのだが

——」

武士たることの悩み、人の子の父たることの悩みに、大坪石見は分別らしい顔を伏せました。

四

平次とガラツ八は一応屋敷の中に居る人間全部に逢って見ました。男は用人の外に中間、ちゅうげん小者、にわは庭掃きの爺、女はお小間使のお延、のぶ仲働のお米、外にお針

に飯炊き。それからもう一人、主人大坪石見の甥おいで、宇佐川鉄馬もつともという尤らしい四十男が、小峰右内の手伝いをして、十年越しこの屋敷の掛かかり人うとになつて居ります。

「私は宇佐川鉄馬、——平次殿か、何分よろしく頼みます」

薄髯うすひげを生やした、少し無精らしい角顔の背の低い男——何時でも眠そうで、無口ですが、そのくせ仕事には至つて忠実で、障子も張れば、水も汲むといった肌合の人間です。

「お嬢様をつれ出した若い背の高い侍というのに御心当りはありませんか」

平次はそんな事から始めました。

「いや一向——私は滅多に浜路さんとは口をきかないのでな」

宇佐川鉄馬は照れ臭そうに笑います。腹の底から女を諦あきらめていそうな男です。

宇佐川鉄馬は、本当は三十を越したばかりですが、誰の眼にも四十過ぎとしか

見えない無精男です。

「お嬢さんの代りになっている、あのお関とか言う娘はどうです」

「お関と言うのかな、あの娘は。先刻まで私は真物の浜路だなんて言い張っていたが——尤もそんな天一坊気取りさえなければ、飛んだ良い娘だ。下町育ちで解りが早いから」

鉄馬はそんな事を言つて他所事よそごとのようにニヤニヤするのでした。

「ところで八」

「へエ」

「お関の親父の午吉うまきちは、浅草で荒物屋をしている様だ。町所を訊いて、捜し出してくれないか」

「へエ——」

「万事はその午吉が知っているに違いない。多分安賭場やすとばか何んかへ潜り込んで

いるんだろう。愚図愚図言うなら、しょつ引いて来るが宜い。親父が口を割りや、
一も二もあるまい」

「へエ——」

八五郎は気軽尻を端折りました。少し花道を駆け出すような調子ですが、
文句のないのと気の早いのと、そして鼻の良いのがこの男の取り柄です。

平次は一とわたり奉公人に逢って見ましたが、何んの得るところもありませ
ん。少し綺麗なお延も、気性者らしいお米も、中間も、小者も、皆んな一季半
季の奉公人で、大それた事をする理由を持って居そうなのはなかつたのです。

用人の小峰右内は五十少し越したらしく、ひたい額の上の光り具合、少しわし驚になつ
た赤鼻、かなつぽまなこ金壺眼——など、あまり結構な人相ではなく、慾も人並には深そうで

すが、主人大坪石見の頼んだ平次を、自分の思い付きのように見せかけたのと、
お篠を絞め殺した真田紐を、何んのちゆうちよ躊躇もなく、嫁の道具を縛った紐と言いきつ

たのが、少し変と言えば変ですが、その外には別に怪しい節もありません。大坪家に二十年以上も住んでいる人間ですから、渡り用人並に、少しくらいは溜めて居たところで引抜いて大伴の黒主などに化ける氣遣いはまずなさそうです。尤もこの屋敷のもので、一番背の高いのは右内で、これで夜目に若い侍と間違えられる見込みがあれば、少しは疑いの圈内に入るかもわかりません。

平次は女たち一人一人に、浜路の身持を訊きましたが、婿金に定まった、三杉の次男坊を嫌い抜いてることは事実ですが、そうかと言って、言い交した男があろうとは思われず、若い娘らしく、いろいろ奉公人たちと話はしていたが、さして執着した名前はなかつたということに一致するのです。

ここまで来ると、平次の探索もハタと行詰ります。この上はガラツ八が午吉を見付けるのを待つ外はないでしょう。

平次は最後にもういちど、婆やお篠の死骸を見舞い、それから押入の中に

首を突っ込んで、徳利とくりが一本隠してあるのを見付けました。婆やはことの外酒好きで、そつと寝酒をやることは奉公人達も知っていました。徳利は綺麗に洗って酒の匂いありません。

五

「親分、おどろいたぜ——」

ガラツ八が帰って来たのは、中一日おいて三日目の昼過ぎでした。

「何をおどろくんだ。御用聞が往来を飛んで歩くと、世間様の方が驚くぜ」

平次は何にかこう、腐くさり抜いていたのです。いっこう他愛わちもないように見え、大坪石見の屋敷の騒ぎが、その後少しも埒わちがあかず、お関の浜路と、用人右内と睨み合ったまま、何うにもならぬ日がつづいて居たのでした。

「親分、こいつは驚くぜ。荒物屋の午吉——草加から出て来て、安賭場やすとばを泳いでいる男が、土左衛門になって大川橋から揚がったんだ」

「何？」

「それね、親分だって眼の色を変えるんだもの。それを見たあっしが、大川橋からここまで駆けて来たに不思議はねエ」

「で、死骸に变りはなかったのか」

「大変り、お篠の伝で、三尺で絞められているんだ。こんどは真田紐じゃねえが、水の中でふやけているから、瓢箪ひょうたんのように括くくれて居やがる。見られた凶じゃあねエ」

「何んて口をきくんだ。仏様を見たら、念仏の一つも称となえて来い、馬鹿」

「へエ」

「それっきりか」

「それつきりならお代は要らねえ。腹巻に呑んだ財布に、小判が三枚」

「たいそう持ってやがるな」

「——その上この十日ばかり、張って張って張り捲まくったそうだから、三文博奕ぼくちにしても、五両や十両は損すっているそうですよ」

「よしよしそれだけ聴けばたくさんだ。茶漬でも一杯搔か込んで、一緒に来ないか」

平次はもう外出の支度をしておりました。

「何処までも行きますよ。一日や半日食わなくなつて、なア——二」

お勝手へ飛込むと、手桶からいきなり柄杓ひしゃくで水を一杯——

「あれ、八五郎さん、御飯の仕度をしていますよ」

お静はおどろいて、その鯨飲げいんぶ振りを眺めました。

二人が小日向こびなたへ駆け付けたのは、その日が暮れかけた頃。

「あの娘に逢わせて下さい」

右内の案内も待たず、平次はお関の浜路の部屋に飛込みました。

「ま、銭形の親分」

「親分じゃねエ、太てえ阿魔^{あま}だ」

平次は日頃のない乱暴な口をきいて、お関の前へヌツと立ちました。

「あ——れエ」

「お姫様らしい声を出したって、驚くものか。なア、お関」

「——」

「お前の父親が、殺されたんだぞ」

「えッ」

「十九年間の育ての親だ。お前の生みの親でなくたって、仇くらいは討つ気になってもよかろう」

「本当ですか、親分、それは」

お関の表情も、さすがに強張こわばって行きます。

「何処から入ったか、十五六両の金を持って賭場とばを泳いでいるうち昨夜ゆうべ、三尺で首を締められて、大川へ投げ込まれたんだ。死骸の上があったのは今日、八五郎が見て来たんだから、嘘じゃねエ」

「まア」

「可哀想に引取り手がないから、まだ大川橋の袂むしろに、筵むしろをかけて投なつてあるぜ」
八五郎は横合から口を出しました。

「――」

「お前の父親を殺したのは、お前をここへおびき寄せた人間だ。――お前の父親の口から何も彼もバレそうになって、八五郎の先廻りむじをして虐むじたらしいことをしたんだ」

「お関、芝居はもうたくさんだ。お前がこの間話した、嬰兒あかこと嬰兒を取換えるというのは、一応筋になりそうだが、実はそう容易たやすく行く芸当じゃない。草加の百姓へお嬢さんを里に出して、立派なお旗本が三年も投っておく道理はないし、三年経って帰って来た偽首を屋敷中の者がみんな気が付かない筈はない」

「——」

平次の論告に圧倒されて、お関の浜路はタジタジとなつてしまいました。が、それでも頑固に口を緘つぐんで、実は——と言つてくれそうもありません。

「お前は黙つていさえすれば、宜いつもりだろうが、黙つて居ると、婆やお篠を殺した罪を背負つて、処刑台しおきだいに、その綺麗な首をさらすかも知れないよ。

それも承知だろうな。この細工を引受けたのは、お屋敷の中では婆やだ。婆やが死んでしまえば、お前の乗込んだ経緯いきさつを、知ってる者はなくなる——」

「その婆やが、お前の部屋にある真田紐で絞め殺されたんだよ。あの晩お前の部屋へ入って真田紐を持って行った者がなきや、下手人はお前だ」

「そんな、そんな、親分」

お関はさすがに蒼あおくなりました。

「よく考えて見るが宜い。俺は四半刻ときばかり、屋敷の内外を見廻って来る」
平次はお関を一人おいて八五郎といっしょに外へ出てしまったのです。

六

「親分、——お関は本当に婆やを殺したでしよるか」

八五郎は庭から木戸へ出る平次の後ろからそつと声をかけました。

「そんな事があるものか」

「だってそう言ったでしょう」

「あれは脅かしさ。おど——若い娘が、寝ている大女を絞め殺せるものかどうか、考えて見るが宜い」

「あつしもそう思つたんだが——」

「それにこれを御覧」

平次は紙入から銀の小さい耳搔みみかきを出して懐ろ紙に挟んで見せました。

「黒くなって居ますね」

「いつか、お篠の死骸を起した時、——噛み付きそうだ——つて言つたらう」

「へエー」

「あの時、この耳搔みみかを死骸の口の中に入れてんだ。帰る時そつと抜いて見ると、この通り燻いぶしたように真黒になっている」

「あの婆やは石見銀山いわみで毒害されたんだよ。婆やが寝酒を呑むことを知っている人間の仕業だ」

「それなら、真田紐は余計じゃありませんか」

「一寸お関の方へ疑いを向けて、その間に婆やを葬ほうむらせるつもりさ。自分の方へ疑いの来ないようにする計略だよ」

「悪い野郎だね」

「野郎だか女だか解らない。——おや？」

平次はギョツとした様子で立ち止まりました。

「親分、何んで？」

「あれを見るが宜い、悪人には不思議に手ぬかりがあるものだ」

指さしたのは、お勝手寄の壁に立てかけた竹竿たけざおの切れっ端、六尺くらいもある

るのに、一尺ほどの曲った横木を縛った十字形のものでした。

「あれは何んで？」

「あの棒に着物を引っ掛けて、上へ団扇うちわか何にか差したのか、木戸の外の下水の縁へでも立てて置くと、面喰った若い娘は、真つ暗な晩だったら、背の高い男と見るようなことはないだろうか」

「なる程ね」

「それでも思わなきや、あの十文字の使い道が判らないよ。それに横木は人間の肩こうばいくらいの勾配で、下へ流れて居るのは、手数のかかった細工じゃないか」

「すると」

「背の低い人間の細工だ」

「シッ」

「人が来たのか。よしよし、もういちどお関のところへ行つて見よう」

二人が入って行くと、お関はもう観念しきった姿でした。

「親分さん、私が悪うございました。どうぞ縛って下さい」

打ち萎しおれて畳に手を突くと、この娘は飛んだいじらしくなります。

「よしよし、皆んな言うが宜い。悪いようにはしない」

「みんな誰かの細工さいくです。父さんがお金を貰って、私にこの役を勤めて見るが宜いって言うんです」

「フーム」

「私も、いつまで経たっても浮ぶ瀬のない貧乏暮しに、すっかりイヤ気がさして居ました。夏になっても冬になっても、着物一枚買うことの出来ないような――

――

――

「お前くらいのきりょうなら、立派に旗本のお嬢様で通る。向う様では祝言が

嫌さに、どうしても家を飛出したいって言うんだから、これほど功德くどくなことはい。——それに殿様はそう申しては悪いが、無類のお人好しで、どんな事があつたつて、お手討などになりっこはないし、こんな面白い狂言があるものかつて言うんです」

お転婆で、無法で、冒険好きな下町娘は、果てしもない貧乏うに倦うみきつて、とうとうこんな飛んでもない役を買つて出ることになつたのでしよう。

「それつきりか」

「え」

「お前は大変な間違つたことをして居るとは気が付かないだろう。——俺は人様に意見をするほどの年寄じゃねえが、お前が馬鹿な事をしたばかりに、婆やさんとお前の父親が死ぬような事になつたじゃないか」

「親分さん」

「泣いたって追っ付くことじゃない。——この上、このお屋敷のお嬢さん——浜路さんに間違があったら何んとする」

「親分さん、どうしたら宜いでしょう」

「お前は本当に、父親に金をやって、こんな事をさせた相手を知らないのだな」
「え、私は何んにも知りません」

「本当か」

平次はしばらくこの飛上がりな娘と睨み合いました。すっかり自尊心を失つて、ときどき痙攣的けいれんに顫えてはおりますが、蒼白く引緊ひきしまった顔は旗本屋敷などにはない不思議な魅力です。

「親分、勘弁してやって下さいよ。可哀想に」

ガラッ八はたまり兼ねて助け船を出しました。フェミニストの八五郎はこの上お関の困惑するのを見ては居られなかつたのです。

「馬鹿ッ」

「へエ——」

「お前は外へ行って見ろ。先刻さっきの十文字になった竹は、もう隠された頃だ。あの竹が見えなくなったら俺を呼べ」

「へエ——」

八五郎は飛んで行きました。

『お関、今お前の父親の仇を討ってやる。見ているが宜い』

「——」

そんな事を言う間もなく、外から八五郎の恐ろしくでつかい咳せきばら払いが聴えま
す。

「御用ッ」

平次が飛付いたのは、掛り人の宇佐川鉄馬でした。

「あッ何をするッ」

「宇佐川鉄馬、御用だぞ。お篠を殺し、午吉を殺したのはお前だ」

「何を馬鹿なッ」

宇佐川鉄馬は小さい身体を跳らせると、苦もなく生垣を越えて、四角な顔を醜く歪めたまま、逃げ腰ながら一刀の鯉口を切ります。

「殿、御用人、——悪者はこの野郎ですよ。縄付を出して構いませんか。それとも追い込んで、槍玉にでも上げますか」

緑側へ出て来た、大坪石見と、小峰右内の方を見ながら、平次は用心深くこう言いました。

人の好い大坪石見はハタと当惑した様子です。縄付を出す不面目を考えないわけではありませんが、手一杯に暴れられると、大坪石見の手でこの男を成敗などは思いも寄りません。

「それじゃ縛ってしましましょう。人別を抜いて、午吉殺しで処刑すれば」

平次は先の先まで考えながら、ジリジリと生垣に迫ります。いつの間に廻ったか、ガラッ八の八五郎は、鉄馬の退路を断って、後ろから十手を光らせて、機会を待つて居るのです。

「畜生ッ、どうするか見やがれ」

宇佐川鉄馬は一刀をギリリと抜くと、一気に縁側へ襲う様子を見せましたが、平次の構えの並々ならぬを見ると、諦めたものか、いきなり肌をくつろげて、ガバリとその切尖を自分の腹へ――。

「あッ」

おどろき騒ぐ人々、それを尻目に、宇佐川鉄馬は声を絞りました。

「えッ、寄るな寄るな。腹を切つてやるのが、せめてもの志だ。手一杯に働けば一人や二人は斬れたが——」

「待て、待て、鉄馬」

縁側の大坪石見の頭には、咄嗟とっさに隠された娘の行方の事が閃ひらめいたので。

「その代り、俺が死んでしまえば、浜路は誰も氣の付かぬところで飢死うえじにだぞ。

この鉄馬という近い身寄がありながら、大坪家の跡取りにも、娘の婿にも考えなかつた罰ばちだ。へッ、へッ、へッ、へッ」

凄惨せいさんな血の笑いが頬にこびり付いて、そのまま死の色が上へ刷かれて行くのです。あたりは次第に暗くなりました。

「鉄馬、それは罪が深いぞ——鉄馬、頼むから、浜路のいる場所を教えてください」

縁側から跣足はだしのまま飛降りて、大坪石見は生垣いけがき越しに、死に行く甥に声を掛

けました。

「へッ、へッ、へッ、親も親なら、娘も娘だ——思い知るが宜い」

「鉄馬」

「十何年間冷飯を食わして、散々コキ使いながら、それで恩を施ほどこしたつもりで居るんだろう。雇人ならとうに飛出して居る」

「鉄馬」

「見るが宜い。浜路はどうせ、この俺と一緒に死ぬのだ。いや、俺よりおくれでも、一日とは生き伸びまい。——あんなに弱って居るんだから、へッ、へッ、へッ、へッ」

「鉄馬、頼む、浜路を助けてくれ」

「嫌だ」

「鉄馬」

「鉄馬」

大坪石見が生垣を押破って飛付いた時は、宇佐川鉄馬は、喉笛のどぶえを掻き切つて、こと切れておりました。

その後の騒ぎは大変でした。後始末もさし措いて、あと一日とは生きないという、娘の浜路の行方を、必死になつて捜したのです。

宇佐川鉄馬の出廻る先は、夜中ながら一軒残らず手を廻しました。隣近所は、恥も外聞もなく訊き歩かせました。が、どこにも居ません。土蔵も物置も、天井も床下も、わけても宇佐川鉄馬の居間は、嘗なめるように捜しましたが、娘一人隠すほどの場所もなく、簪かんざし一つ、紐一本落ちてはいなかつたのです。一と晩の努力も空しくて、夜は白々と明けました。

「平次、何とか相成るまいか、浜路は当家のたった一と粒種だ。千万金を積ん

でも、この石見いわみの命に替えても捜し出さなければならぬ」

大坪石見は、平次の前に手を突いて頼み込んだのです。

「あつしでも、この上の捜しようはありませんよ。宇佐川鉄馬さんの怨うらみだ。十何年も居候をして居た人じゃ、変な気にもなるでしょう」

「どうすれば宜いのだ、平次」

「よく弔とむらって上げて下さい、——それっきりの事ですよ。ところで」

平次は深々と腕こまぬを拱きました。

「親分」

「お前は黙って居ろ」

「あつしは変な事を考えたが」

と八五郎。

「何んだ」

平次はガラッ八の方をジッと見ました。

「お嬢さんの隠された場所が判ったような気がするんです」

「俺も判ったような気がする」

「二人で書いて見ましようか」

「面白かろう」

紙にも硯にも及びません。平次は火鉢の灰へ、八五郎は縁の下の柔かい上へ

「ひいふのみ」

火鉢と縁の下と、位置を変えてのぞくと、二人共、

——ながもち長持の中——

と斯こう書いてあったのです。

それと飛んで行って、お関のいる部屋の隣。嫁の道具を一パイに積んだ下

から、長持を引出して蓋を払いました。

「あッ」

中には娘浜路が滅茶滅茶に縛られた上、猿轡さるぐつわまで噛まされて、息も絶え絶えに、半死半生の身を横たえていたのでした。

×

×

「八、どうして長持の中と判った」

帰り路、朝の清々すがすがしい風に吹かれながら、平次は訊きました。

「ただ何んとなしに、そんな気がしましたよ」

「心細いなア」

「じゃ親分は」

「長持の蓋の角に生々しい傷があつて、穴があいて居たことに気が付いたんだ。祝言前の嫁の長持に穴があるわけはない。あれは息抜きに違いないと気が付い

たのさ」

「なアーる」

八五郎はピタリと額を叩きました。親分の推理に、ともかく直感で追い付いた自分が嬉しかったのです。

「ところであの居候は可哀想だね」

「あんな悪い野郎が？」

「十何年も給料のない奉公人並に扱われて、気が少し変になったのさ」

「それから、あのお関も可哀想じゃありませんか」

ガラツ八は臆面おくめんもなくこんな事を言うのです。

「せいぜい親切にしてやるが宜い。親父が殺されて、たった一人になったんだから心細かろうよ。しょんぼりと帰って行った姿が目に残るぜ。尤も顔は綺麗だが心掛はあまり結構じゃない」

そんな事を言いながら、二人は妙に物足りない心持で神田へ急ぐのでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十五年五月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行
銭形俱樂部

二人浜路



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>